

楠公の末裔たちの幕末・明治

—楠家所蔵『柏原家系譜』の記載を中心に—

本 間 正 幸

—

比叡山を間近に臨む風光明媚の地、洛北岩倉。その地の古刹に五升庵瓦全（延享元（一七四四）—文政八（一八二五）は静かに眠っている。寺の名は顕本法華宗総本山妙満寺（京都市左京区岩倉）。かつては市中寺町二条に敷地を構え、松永貞徳造営「雪の庭」や安珍清姫ゆかりの梵鐘で知られる古刹であった。ただし、江戸期には度重なる大火に伽藍を焼かれ、近代以降も法令によつて幾度か寺領を縮小される悲運に見舞われてきた。その後、昭和四十三（一九六八）年を機に都塵を離れた現在の地に移転^①。おそらくはその際であろう。瓦全一族の墓碑は一箇所にまとめられ、崩落防止のためワイヤーで一括りにされ、一見しただけではどれが瓦全のものか判別しがたい状態にある（**〔図版〕**A—1参照）。

そもそも、この柏原瓦全という俳人。師に当たる田中蝶夢の蕉風復興運動に与したり、五升庵を継いで師の顕彰活動に寄与したり、その功績ではつとに知られているが、果たしてどのような家系に生まれ育つたものであろうか。それは未だ解明されていないように見受けられる。しかし、それに光を当てようにも、菩提寺の過去帳は禁門の変（元治元（一八六四）年）の大火で焼失。先述したように墓碑の方もワイヤーで一括りにされ、碑面の確認もままならない状態にある。

これ以上の調査は無理かと思いついて折、子孫に当たる楠まさ氏（京都府在住）が同寺の檀家として御健在であるという噂を耳にした。その後同寺の執事・中村英司氏の仲介によって拝面かない、所蔵品を調査する機会を得た。披見した資料は、同家の系図（冊子本と巻物、各一点）、瓦全自筆和歌短冊、瓦全夫婦とその両親の位牌の三種類。それ以外の伝来品は、残念ながら太平洋戦争の終結期までにほとんど失われてしまったとのこと。

以下、披見した資料について簡単に記しておきたいと思う。まずは最初に挙げた系図について。同家には『橘宿禰朝臣大系譜』（巻首題）と題する大本一冊（以下『大系譜』と略称）と『柏原家系譜』（巻首題）と題する巻物一卷（以下『系譜』と略称）とが伝存する（【図版】B参照）。両者は合わせて一对の系図となっており、前者には難波皇子から正雅まで、後者には正亮から正彦までが掲載される（ただし、正亮から正雅までは両者に重複して掲載）。両者ともそれぞれ複数の手で執筆されたものと推測されるが、成立の経緯は不明。拙稿「『柏原家系譜』と五升庵瓦全の家系―扇商の実態を中心に―」（『連歌俳諧研究』第二一五号 平25・9）では、後者『系譜』の記載に注目しながら、家業である扇商の実態について簡単に報告した。書誌等の詳細も含め御参照いただければ幸いである。

それ以外に同家が所蔵する資料は瓦全自筆和歌短冊と瓦全夫婦とその両親の位牌のみ。前者自筆和歌短冊は、字の印象から比較的若い頃の染筆かと推測されるもの。捲りと思われる日に焼けた短冊の表面には、次のような和歌が書き記されている。

僧日蓮 新らしく開きし法の花の上にねたむあらしの吹すさびけん 瓦全

裏面には次のような書き付けも見受けられる。

昭和卅四年十二月卅一日 阿刀弘文恭贈

五舛菴二世瓦全御裔孫 楠家御中

これを見ると東寺の第四十三世執行阿刀弘文氏が「恭贈」した短冊であったことがわかる。御当主の記憶を溯るに、東寺での展覧会のため伝来書を借用に來た折に持参したものであったとのこと。

もう一点は瓦全夫婦とその両親の位牌。同家には夫婦一基ずつに合祀した、いわゆる「夫婦位牌」なるものが伝存する。その表裏には次のような文字が刻されている。

ア 南無妙法蓮華經
榮昌院妙絶日閑
林昌院常山日松

〈裏〉 榮 明和七庚寅年正月四日
林 宝曆九巳卯年五月十五日

イ 妙法
蓮池院瓦全日芳居士
蓮心院妙恵日榮信尼

〈裏〉 なし

アは瓦全の両親の位牌。「林昌院常山日松」が父親、「榮昌院妙絶日閑」が母親の法号（戒名）。裏面の記載を見ると、父親は瓦全十六歳の折、母親は二十七歳の折にそれぞれ逝去していることがわかる。イは瓦全夫婦の位牌。裏面に没年の記載が見られないのが残念だが、瓦全の妻に付された「信尼」の位号が目を引く。詳細は不明ながら、これは瓦全没後のある時期に出家したことを示すものであろうか。

とまれ、同家に伝わるものは右に挙げた系図・短冊・位牌の三種類のみ。しかも先述したように和歌短冊は阿刀氏から寄贈されたものであり、もともと同家に伝来した物ではない。とすると同家の伝来品は系図と位牌しか存在しないことに

なるのである。後述するように、古くから連綿と続く家柄であったと推測されるのに、なぜこれだけしか伝来品が存在しないのか。おそらくそれは幕末・明治の頃同家を襲ったある出来事の余波によるものと推測される。本稿ではその出来事によって同家が抱え込むことになった喪失の歴史を垣間見てみたいと思う。同家所蔵『系譜』の中には、同家の伝来品をめぐって派生した「喧噪」とも呼ぶべき事態が詳細に書き留められているのである。

二

本題に入る前に『系譜』全体を眺め渡して気付いた点を二つばかり示しておきたい。

まず第一に、瓦全の家系が菩提寺の妙満寺と極めて深い関係にあったこと。『系譜』を見ると妙満寺の貫首や同寺の末寺成就院の住職を務めた者が一族の中に複数存在することがわかる。瓦全の大叔父日寛とその甥素休の記載に注目しよう。⁽³⁾

僧都日寛 同上（正茂） 四男。幼名照市。出家^而初号正好日了、後體玉日寛。十三歳^ニして都^ニのぼつて出家となり、

本山妙満寺^ニおゐて得道し成就院律師日恕^ニ随ふ。長じて後、上総國宮谷檀林^ニ入て修学をとげ、終^ニ能化となりて再都本山^ニ登り、歴代八十二世の法燈をかゝげ、檀林四天の學匠と仰る。

宝曆二年^{壬申}十月十五日於上総、遷化 六十二歳

関本法寺住 祢天受院権少僧都體玉日寛

葬五井圓乗寺

本山歴代之法孫

東金西福寺 日遠 土氣善勝寺 日満 田中法光寺 日詮 土氣善勝寺 日精 田中法光寺 日題

素休 正實男。出家。

日寛上人の弟子となり修学をとげて本山成就院の住職となりて日照といふ。法孫今^二有。

安永八年^一 亥四月廿二日遷化

没年から逆算するに、日寛の生年は元禄四（一六九二）年。妙満寺において得度し、同寺の貫首にまで登りつめた人物であったようだ。『系譜』で法孫にあげられる日詮もその縁者（日寛の妹の曾孫）に他ならない。『系譜』には記載されないが、前掲中村氏の御教示によれば、この日詮もまた妙満寺の貫首を努めた人物であり、字は寛順。文政四年の早魃の際、祈雨の儀式を行ったことから、「雨乞日詮」と呼ばれた記録もあるらしい。文政七（一八二四）年八月、妙満寺にて遷化（五十五歳）。そこから逆算すれば生年は明和七（一七七〇）年となる。また日寛の甥素休（日照）も右に挙げたように妙満寺成就院の住職を務めた人物であった。そのような人物を輩出した家系に育つたため、瓦全の中にも法華宗への堅固な信仰心が生まれたものであろうか。日蓮への尊敬の念は前掲和歌短冊の中にも色濃く表れている。

さらに重要な特徴がもう一つある。それは同家が系図上、楠木正成の流れを汲む家系に当たるといふ点だ。藤田精一郎氏『楠氏研究』（積善館 昭和十七年増訂七版）によれば、「楠氏系図」には「群書類従本橋系図」「尊卑分脈楠系図」を始め、「河内甲斐庄楠系図」「讃岐高松楠系図」など多くの種類があるようだ。同家の系図は「丹波國柏原系圖」の名で挙げられるものと同類と見ていいであろうか。いま『大系譜』『系譜』によつて正成以降の流れを簡単に示せば、末尾に挙げた【系図】のようになる。

これによると同家は正成の三男正儀の流れを汲む家系であり、瓦全は正成から数えて二十代目の当主に当たることがわかる。とすれば、文政五（一八二二）年版『平安人物志』で「橋」姓を名乗っていた理由も明らかになるであろう。

橋姓は楠木氏の本姓であり、そもそも前掲『大系譜』の巻首題自体に「橋宿彌朝臣大系譜」とあったことが想起される。柏原姓は一説に正勝（正儀の長男）が丹波の国上杉庄に移住した際、「上杉荘の隣の地、山筋をひとつ越えたところ」にある字の名（上柏原・下柏原）にちなんだものとされる⁵。しかし、『大系譜』の記載に従えば、正勝の代であることは同じながら、その理由は「父正儀好栢樹干庭、有森々古木。時人称之柏原殿。以此申称柏原」、すなわち正儀が栢を好み庭に植えたことにちなんだものということになる。

それとはもあれ、藤田氏が前掲書の冒頭において「吾人、今にして尚ほ忠烈無比の大楠氏家系を詳にする能はず、また今にしてその正裔を明かにする能はざるは、誠に遺憾のことなりとす」と記すように、楠氏の系譜に関しては不明な部分が多い。氏の言葉を借りれば「その名乗りすらも後出史書には、彼此混同し、その血族關係に於ても、諸書互に矛盾せるものあり」といった状況にある。氏は「丹波國柏原系圖」に關しても、正虎を寛正頃の人とする点を「信ずべからざる⁶」ものとしており、同家が楠公の血脈とどのようにつながっていたかは、今後さらに慎重に検討すべき問題と言えよう⁷。

本稿ではむしろ幕末・明治の頃、同家が世間から楠公の一族と見なされ、その伝来品が注目を集めていたという事実の方に注目したいと思う。なぜなら、一族の中にはそれによつて人生を大きく左右されてしまった人物も存在するからだ。七代続いた扇商の主人から一躍岡山藩士へと転身した瓦全の曾孫正家こそ、その人物に他ならない。『系譜』によれば、「楠」への改姓もこの時になされたものだという。

三

少々長くはなるが、正家に関する『系譜』中の記載をそのまま引用してみよう（〔図版〕C参照）。

正家 正克男。正太郎。継業、改嘉祐。後、復旧姓、号楠次郎左衛門、後改号繁夫。

元治元年三月備州松平備前守殿（戸中納言春明御九男池田家御相繼）御在京中、不圖達御間、當家傳宝入御覽、目通被仰付、御料理并御産物限濃縮緬帋卷被下之。慶應二年十一月廿五日依御懇望、傳來家寶之内左之品位猷之。

母公夢中多門天出現其形容ヲ以テ造ル所也

一 ● 楠公御着初卯花威具足皆具 ● 辛櫃入 一 ● 楠公唐織御陣羽織（山吹ナガシ）

一 ● 楠家重宝忍鈴（遠祖慈城王ヨリ傳來ノ名品也本朝二箇一） 一 ● 楠家重宝青銅龍（折麩南起雲）

返す人

一 ● 楠公御正像正行君筆 ● 一正行君（石御正像認書百筆） ● 一御正像由来書（正虎君筆）

一 ● 楠公御物御工風形文庫 ● 一楠公御自作筋冑 ● 一楠公鏡（前立物）（後醍醐帝ヨリ拜領）
（御名并年号有）
（晋福二天皇御在押アリ）

（當代織品ナリ）
（山吹流紋付）

一 ● 楠公湊川御所持西蓮国吉太刀 ● 一楠公御物鈴（御名并年号有） ● 一虎卷（正虎君筆）帋卷

一 ● 楠公御筆二相ノ傳 ● 一玉方陣記 ● 一戦闘手段篇 ● 一楠家軍法秘書三卷
（楠公御筆）
（正虎君書）

一 ● 軍法書 ● 一楠家兵法書 ● 一雄鑑抄 ● 一楠公角形陣太鼓 以上廿二品也
（正廣君書）
（正廣君加注）

右同年十二月一日於京都御館被召抱、同日依君命復旧姓御小性相勤御衣紋方被仰付。明治元年正月東海道鎮撫總督為先鋒出兵、金方兵糧方總裁相勤。同年三月御親征行幸供奉、金方兵糧方相勤。明治三年京都岡山縣出張所奉令掛兼負

幣金見届役麩米見届役、同五年迄相勤。明治六年九月湊川神社任権祢宜補兼訓導、同七年十二月辞職。同年四月依願御免。

明治十年七月十九日傳來家宝ノ内三十五品備 天覧、不願而自然蒙御沙汰、家之百回目為子孫者之規模也。此事別記ニ委シ。

同家は継業の際、表記こそまちなながら「カスケ」を名乗っており、「継業、改嘉祐」とあるように、正家も最初は家業を継いで「嘉祐」を名乗ったものと推測される。同家は「貴嶺扇」という「骨十一本、地が赤紙の扇」（『日本国語大辞典第二版』第四卷 小学館 平成十三年刊）をこれまで六代にわたって製作し続けてきた。『日本国語大辞典』はその「貴嶺扇」に関して『喪志編』（伊能魚彦著 寛延二（一七四九）年成）から次の記事を引用する。

貴嶺扇と云は、貞和の比の帝扇合の御遊ありしとき、諸家より種々の扇を献ず。中山家より献ぜしが此扇にて、骨十一本、地は赤紙也。此扇今に作る人ありて、由来は記に詳なり。

これ以外にも「貴嶺扇」を立項する辞書はいくつか見られ、それぞれに異なつた用例を挙げている。いまそれを年代順に示せば次のようになるであろう。

- a 扇あふぎ子は常の拾本骨十二立たちがよし、壹尺二三寸から上の大扇おほあふぎ子貴嶺扇此二品は必くもたぬがよし
（明和六（一七六九）年『間似合早粹』）
- b 扇あふぎ子は京都のきれいな扇に丁字引
（明和七（一七七〇）年序『興談浮世袋』一二）
- c 殿中扇を見わたせば、わけて中にも寄麗扇キレイセン
（享和三（一八〇三）年『歌舞伎年代記』九中）

aは前田勇氏編『近世上方語辞典』（東京堂書店 昭和三十九年刊）、bは『角川古語大辞典』第二卷（角川書店 昭和五十九年刊）、cは『日本国語大辞典』（前掲）に例示されるもの。年代的に見るとabが瓦全、そしてcがその息子正度の代の記事となる。aからは一般の扇よりも大ぶりで携行しづらいという欠点があつたこと、bからは丁子引の扇と人気が二分し合っていたこと、そしてcに「殿中扇」とあるところから、公家だけでなく武士の礼装用にも用いられていたことがわかる。『翁草』（神沢杜口著 寛政三（一七九二）年成）第四百二卷には扇の骨にまで「細き毛彫^{ケボリ}」を施した風流な仕立ての扇であり、一本「金子壺^{ウツ}」で売られていたことが記されている。携行しづらいにもかかわらず、大振りで華美な装飾（彫刻）を施した高価な扇は、貴族や上級武士のステータス・シンボルとして愛用されたものであろうか。

『太邇波志』（北村継元著 明和五（一七六八）年頃成か）には次のような記載も見受けられる。

上杉村にて今貴嶺扇を作り出せりといふ。貴嶺扇ハそのかみ扇合に中山殿の出されし扇の製なり。中山二字、貴嶺の字上に冠りたれば名づけし也。

（『福知山市史 史料編三』（福知山市役所・平成二年刊）による。ただし、引用に際し、任意に句点・濁点を補った）

同書の成立時点（明和五（一七六八）年頃）での柏原家の当主は三代目の正當。この時点では既に京に転住して四十年以上経過しており、「上杉村にて今…作り出せり」という記載には疑問が残る。ここは転住前後の正雅（初代）の噂を現在のことと勘違いしたものであろうか。なお、右によると「貴嶺」の命名は「貴」「嶺」それぞれの字の頭に扇を献上した中山家の文字が含まれていることにちなんだものだという。

安永四（一七七五）年序『誹諧名所方角集』「相國寺」の項に「境内の竹を以、貴嶺扇を製すと云」とあるのも正雅を指したのか。『系譜』には「相國寺門前二偶居し、遂二扇を折て生産とす」とある。安永四年時の当主は瓦全だが、瓦

全が相国寺の竹を利用したという記載は、『系譜』中には見受けられない。

また岡山市立中央図書館郷土資料室国富文庫には「貴嶺扇」の引札が所蔵される（【図版】D参照）。適宜句読点・濁点等を補いながら全文を紹介すれば次のようになるであろう。

貴嶺扇

昔承安の年比とかや、内裏に御扇合の事ありて人ぐめづらしき御あふぎをつくりて奉らせ給ひし中にも中山の内のおとゞの風流の御扇いろくを好出してつくらせ奉りけるぞ、いと御興ありしとかや。其御遺風、家の手すきみに傳り、今是におもひよりいとなミとなしける。よつて御銘をきれいせんと給ふ。

御用所

上京八條殿町
柏原嘉介

銘の頭には菊の紋章（赤）が付されている。「御用所」の表記は「柏原嘉介」となっているが、『系譜』による限り、この表記で表されるのは瓦全の孫正克ただ一人であり、その代のもものと見ていいであろうか。また、「貴嶺扇」の発祥とされる宮中での扇合が、右では「承安」（二一七―一七四）のこととされ、前掲『喪志編』が「貞和」（一三四―一五〇）のこととするのと齟齬を来している。前者と解すれば扇を献上したのは中山家の初代当主忠親、後者と解すれば六代目の当主定宗となる。どちらが正しいのか俄には判断できないが、いずれにせよ、『系譜』中に瓦全がお目見えしたと記される中山愛親はこの中山家の後裔、二十一代目の当主に他ならない。

それはともあれ、『系譜』には初代正雅から六代目正克まですべて扇の銘にちなんだ「貴嶺□代の祖」という称号が付されている。しかし七代目の正家にのみ、その称号が付されていない。これは家業でめばしい成果を上げられないまま転職したことによるものであろうか。正家を最後に『系譜』中から「カスケ」の名も見られなくなり、代々続いた家業にも幕が下ろされたものと推測される。

その転機は元治元（一八六四）年に訪れた。楠公の末裔の噂を聞きつけた在京中の岡山藩主（池田茂政）が、伝来品を観覧し、献上を懇望。それに応えるかたちで二年後の慶應二（一八六六）年十一月二十五日に希望の品を献上し、それを機に在京の岡山藩士（七人扶持中小姓）として召し抱えられることになる。その際、同時に楠姓に復するよう命じられてもいるのである。『系譜』中には献上した品物が「廿二品也」と記されているが、実際には二十一品しか挙げられていない。ここで正家が岡山藩に召し抱えられる経緯を綴った別の資料を参照することにしよう。岡山大学池田家文庫所蔵『御奉公之品書上』⁸なる仮綴じ本がそれだ（以下『書上』と略称）。筆者の岡山藩士楠繁夫は、『系譜』中にも「後改号繁夫」と記されるように、正家の改名後の名前に他ならない。すなわち正家自身が記した書上が池田家文庫に伝存するのだ。同書によれば、献上した品は十九品。『書上』では、『系譜』中の「楠公御正像正行君筆」「正行君右御正像 認書自筆」を一品として扱っているためその数になつており、これを分けて数えればやはり二十一品が正しかったことになる。『書上』によれば、一度に十九品を全て献上したのではなく、慶應二年十一月二十五日に以前から懇望の十四品を献上し、岡山藩士に取り立てられた後、再度同年十二月八日に五品が追加献上されていることがわかる。

『系譜』中には生没年が記載されていないが、『書上』が書かれた明治二（一八六九）年に「私義當年三十八歳罷成申候」と記しているところから、生年は天保三（一八三二）年と判明する。とすれば、二十九歳の時に父正克に死別。その頃には既に家業を継いでいたものであろうか。そして元治元年、三十三歳の年に岡山藩主の面識を得、以後は先述したような経緯を辿る。四十二歳の時（一八七三年）、正成を祀る湊川神社の祓宜補兼訓導職に任じられるが、翌年（一八七四年）辞職。同年、岡山藩士も依願退職している。その後、明治十（一八七七）年、四十六歳まで生存した形跡が窺われるが、正確な没年は不明。ただし、三男正彦に関する『系譜』中の記載に「生後半ニシテ年父ヲ失ヒ」とある。正彦が明治二十六（一八九三）年に高等小学校を卒業していることを手がかりにすれば、明治十一、二（一八七八、七九）年頃、五十歳を前に没したのではないかと推測される。

それにしても、驚くべきは正家が岡山藩にかなりの数を献上したにもかかわらず、なお「三十五品」もの伝来品を明治十年に天覧に供している点であろう（ただし、『系譜』中の「別記」が何を指すかは不明^⑨）。既に献上した品物と合せれば、五十四点もの点数にのぼる。もともと同家にはどれほどの点数が伝来していたのであろうか。また、『系譜』によれば瓦全の代に天明の大火に罹災し居宅を失ったとされる。その際これらの品々はどのようにして難を逃れたのであろうか、興味が持たれるところである。

四

その子正雄・正彦の代に至ると、楠公の子孫であることがさらに喧伝され、いつそう世間の注目を集めることになる。正雄に関する『系譜』中の記載には次のようにある。

正雄 同上（正家）男。母同上。正家ノ後ヲ継グ。十八歳死去。恭敬院信樂日法居士

幼時父ヲ失ヒ専ラ母ニ育テラル。或縁故ニヨリ元京都府知事北垣國道氏ノ指導恩顧ヲ蒙リタル事アリシモ未ダ

八才ニテ早世ヲ見タリ。

明治十八年七月十八日正成公五百五十年祭事執行ス。之ニツキ日出新聞紙上ニ左記之通廣告ス。

謹告

本月家祖正一位正成公五百五十年正當ニ付来ル十八日洛東建仁寺方丈ニ於テ祭事執行ス。伏テ乞諸君追遠ノ微志ヲ贊ケ詩文和歌等祭神へ御寄贈ヲ得バ啻ニ祭典ニ光榮アルミナラス、靈位弔慰ノ旨ヲ貫徹シ弊家ノ大幸不過之候。當翌日共傳來ノ震翰及遺物ヲ祭場ニ陳列シ諸彦ノ觀ニ供ス。

右の「謹告」は『日出新聞』（現・京都新聞）明治十八（二八八五）年七月十五日（水）・第八十三号（四面四段目）にほぼ同文で掲載され、末尾に「列品參觀期 十八日午前十時ヨリ午後四時迄／十九日午前七時ヨリ正午十二時迄／祭主 二十四代目楠正雄／後見 生駒正久」と付されている。¹⁰なお、同紙同月二十一日（火）・第八十八号（三面四段目）にはこの時の記事が「楠公祭」の見出しで次のように掲載される。少々長くはなるが、貴重な資料であり、内容的に興味深い部分も含むので全文を紹介したい（括弧内は原文のママ）。

洛東建仁寺に於て、十八日に執行せし楠公五百五十年祭主は公が二十四代の正統楠正雄氏にて、祭場の壇上へハ公の肖像（嫡男正行母の命に依り自筆に之を模写せしものにて袷袢ハ公が鎧直垂の裂地を用ゆ）を祭り、神官祝辭を奏し祭主以下拜禮して式を畢る。此日嘗て（明治十年）天覽に供したる正雄氏の秘藏品たる後醍醐天皇の宸翰并びに公及び一族の遺墨遺品百二十餘点を虫拂ひの爲、同寺の客殿に陳列し參詣の諸人に縦覽せしむ。就中、「万國細見の圖」三幅は公が十四代目柏原正廣氏（号一齋）が著述せしものにて、貞享の比、其孫正茂氏は大石良雄氏と交情深くして良雄氏が懇望に任せ、一旦譲り與へしも、元祿中主家の凶變に際して湮滅せん事を恐れ、楠家へ返戻せし由緒深くしてなりと云。又此祭典に付て諸方より詠進せし和歌は三百十有餘章に及びしが、其内耳に止りし二三を左に掲ぐ。題ハ「詠史」及び「壞舊」なり。

大君の御夢のうちに顛れし楠の大樹の根こそゆるがね	遠藤千胤
まごころの靈の光りハ世にみちて民ぐさあをぐ楠の神	赤澤太冲
あかねさす光と共に曇なき君がいさをハかゞやきに亮 <small>けり</small>	富岡はる子
君が爲花とちれ共いさをしハいまも匂へる櫻井のさと	三井つう子
大御代の杖柱とも頼みしを中折れしつる楠をしぞ思ふ	三景樓花扇

公の御墳しるしの臥龍梅をよめる

樟樹を梅にうつしておくつきの印のいしに薫りつる哉

蘭美蔭

まめ心こりて石共成にける楠こはくすしき木に社こ有けれ

拜郷蓮茵

右の記事を見ると、同家には明治十八年の時点で「百二十餘点」もの伝来品が所蔵されていたことがわかる。岡山藩への献上品と合わせると総計百四十点以上の点数がかつて存在した計算となる。その内の一つ、正廣筆「『万国細見の圖』三幅」は、正茂が大石良雄に寄贈した物だが、吉良邸への討ち入りへと発展する「主家の凶變」に際し、同家に返戻された曰く付きの代物であったとのこと。また、献歌した人々の顔ぶれを見ても、当時の歌人・医師・国学者など錚々たる面々が名を連ねており、同家の交際の幅広さをうかがわせる。中には富岡鉄斎の妻・晴子の名前も見える。

祭主の正雄は正家の次男。『系譜』に生没年の記載はないが、長男①の成之助が慶應二（一八六六）年十二月に「當才」で亡くなっているため、それ以降の誕生と推測される。十八歳で没したとされるが、明治十八年に建仁寺でこの祭事を営んでいる点、仮にその年に亡くなったとしても、明治元（一八六八）年の生まれとなる（時に正家三十七歳）。死因は明記されておらず、もともと蒲柳の質であったとも考えられるが、そうでなくともこれだけ大きな祭事を（たとえ後見人が付いていたにせよ）十代の少年が取り仕切るのには並大抵の苦労ではなかつたはずだ。享年から推測するに、この祭事から程を経ずに逝去したと考えられるが、あるいはその心労も災いしたのではないかと推測したところである。

祀られた楠公は明治十三（一八八〇）年に正一位を追贈されており、ちょうど人々の関心が集まった時期に催されたこの祭事が契機となったものか、兄の後を受けて一家を支えた正彦の代にも、引き続き世間の注目を集めることになる。正彦に関する『系譜』中の記載に注目しよう。

正彦 同上（正家）男、戸籍上及通稱共三彦。母同上。妻こと、滋賀縣高島郡本庄村北船木土族奥山三千之助長女。生後半ケ年ニシテ父ヲ失ヒ専ラ母ニ育テラル（以下、略歴省略）。

明治二十六年四月十日傳來ノ楠家遺物、有栖川威仁親王殿下ノ尊覽ニ供^ス。樞密顧問官文事秘書官長細川潤次郎君・京都府知事千田貞暁君^及第三高等中學校長折田彦市君亦參觀^{セラル}。

明治二十六（一八九三）年四月十日の出来事は翌日の『日出新聞』一面に掲載されたらしい。その記事の詳細も『系譜』中に写し取られている。それによると有栖川威仁親王・細川潤次郎・千田貞暁・折田彦市の四氏は後醍醐天皇の繪旨ほか、三十点以上もの貴重な遺品を観覧。有栖川親王が鎧を直接着けて御覧になったことや、細川氏が楠公の妻滋子の手になる『伊勢物語』の書写本に驚嘆し、他の資料も含め今後二・三日通い詰めて熟覧したいという意向を示したことなどが報道されたという。この記事は『日出新聞』明治二十六年四月十一日（火）・第二四一七号（一面六段目）に「楠公の遺物」という見出しで掲載されており、内容的にも『系譜』の記載と齟齬をきたすところはない。

さらに翌（一八九四）年一月には前掲細川氏の仲介によって京都帝国大学に『楠家傳來重寶寫卷』『同證書卷』二巻が貸し出されたようだ。返却に際し当時の総長濱尾新氏から贈られた感謝状の文面が忠実に写し取られている。二年後の明治二十八（一八九五）年には、京都で開催された帝国教育大会で伝来品の公開観覧会が行われたらしい。やはり、大会長渡邊千秋氏から送られた感謝状の文面と、遺物保存費として三十円を寄附された旨が書き記されている。さらに時代は下つて大正五（一九一六）年十一月、京都岡崎で開催された博覧会にも京都帝国大学事務官中山親和氏の依頼によつて楠公像ほか数点が出展されたようだ。京都市教育会長久原躬弦氏から贈られた感謝状の文面も『系譜』中にそのまま写し取られている。

これら『系譜』中の記載から推測するに、伝来品の献上によつて岡山藩士に取り立てられ、結果として家業を廃業する

に至ったり、十代にして楠公祭の祭主に担ぎ出され多大な心労を抱え込むことになってみたり、度重なる展覧会・研究機関への貸し出しや、慌ただしい日程での公家の訪問に対応を迫られたり、そして事あるごとに新聞に取り上げられ、世間の注目にさらされたり。正家を始めとする楠公の末裔たちにとって、幕末から明治にかけての時代は、一家の伝来品に翻弄され続けた「喧噪」の日々であったと称しても過言ではないであろう。

五

しかし、明治の中頃には百二十点以上存在したはずの伝来品も、この後、わずか百三十年足らずの間に一つ残らずその姿を消し去ってしまった。単純計算をすれば、一年に一点ずつ貴重な伝来品は姿を消していった計算になる。『系譜』中に記された岡山藩への献上品や先の新聞記事に見られた大石良雄への寄贈の一件などを見ると、もともと同家には懇意にする者や懇望する者には伝来品を気前よく寄贈・献上したり、求められるままに貸与してきた形跡がうかがわれる（御当主からの伝聞によれば、先に挙げた有栖川親王訪問の際にも何点かが献上されたらしい）。しかし、正家没後数十年の間に伝来品喪失の危機は徐々に深刻化していったように見受けられる。プライベートの関係もあり具体的な引用は避けるが、『系譜』一巻の巻末には伝来品や遺産を守り抜こうとした母（すなわち正家の妻）に対する正彦自身の讃辞が捧げられている。

それを見ると、他家に貸し出されたまま放置されていた物も何点かあったようだ。いったん価値あるものとしての噂が立つと、それまで関心を示さなかった人からも貸与の要請が重なったのではないか。そして返却されないうまま放置され、うな気配を感じ取った時、正家の妻三千子は取り戻しに奔走したというのであろう。その苦労たるや察するに余りある。現御当主の記憶を辿っても、その後も展覧会等への出展要請は折々続いたようだ。しかしそのまま返却されなかったもの

や、太平洋戦争末期の混乱時に行方不明になったり焼失したりしたのも少なからずあったという。今となつてはその行方を追うことは難しく、焼失したものは二度と戻つては来ない。一族が代々伝えてきた家宝は、まさに一炊の夢のごとくその姿を消し去つてしまつたのである。

しかし、一家の伝来品は儂く消え去つても、人々が生きた証だけは今日も妙満寺に残されている。楠繁夫こと正家だけは別所（實報寺）に埋葬されているようだが、それ以外の「貴嶺六代」に数えられた人々や早世した兄弟たちは、多くこの地（妙満寺）に骨を埋めているのである。¹²なかでも、「於家其功代々の先蹤二起たり」（『系譜』）と崇められ、『系譜』前半部の執筆者と目される瓦全の孫正克の墓碑に刻まれた辞世の和歌は、一族の思いを代弁したものと見て、ひときわ心を打つ。

世を思ひ君をおもひのミなと川きよき流を汲もかしこし

死の間際にあつても、正克の脳裏をよぎり続けたものは、湊川で戦死した正成の雄姿と、その血筋に繋がっているという矜持に他ならなかつた。「きよき流を汲もかしこし」の措辞には、そのような血筋に生まれ合わせた僥倖を愛で慈しむ気持ちの色濃く表れている。

そしてその想いは、ひとり正克だけのものではなかつたであろう。瓦全も含め「貴嶺六代」に数えられた人々も、そしてその称号こそ得られなかつたものの、晩年湊川神社の祢宜補を務めた瓦全の曾孫正家も、またさまざまな機会に家宝を展覧に供し、自らの血筋を世に示そうとしたその子正雄・正彦も、そして今日まで楠姓を守り続けてきた多くの子孫の方々も、おそらくは皆同じように楠公の血筋にある誇りを胸に抱きながら祖霊を祀り続けてきたに違いないのである。

- (1) 『連歌俳諧研究』第三十二号(昭四十二・二)所収「全国大会の記(浅田善二郎氏稿)に、昭和四十一(一九六六)年十月二十四日、第十八回俳文学会全国大会の俳跡見学として移転前の妙満寺を訪ね、「貞徳画像、盆山記、雪の庭その他」を拝観したことが記されている。また加藤定彦氏に移転後の妙満寺を訪問した所感をつづった「妙満寺と雪の庭」(『俳文学研究』第四号 昭六十・十)と題する文章がある。
- (2) 前掲中村氏によれば、「信尼」は古くから女性の出家者に授与されてきた位号であり、出家していた可能性もあるとのこと。ただし、位号の付け方には時代的な変遷もあり、正式な尼僧であったのか、得度のみで修行は行っていないか、単に篤信者という意味に留まるのかは不明であり、場合によっては、結婚前の宗派の影響もあるとのこと。
- (3) 引用に際し、適宜濁点句読点を任意に補った。以下『系譜』の引用に関しては同じとする。
- (4) 国際日本文化研究センターウェブサイト (<http://www.nichibun.ac.jp/graphicversion/dbase/heian-jinbutus.html>) による。
- (5) 「天月一BOOK」のブログ「楠木探訪録その77 柏原氏その②」(<http://blog.zaq.ne.jp/kusunoki/>) による。
- (6) 『大系譜』には「兵衛。河内太郎。従四位下河内守。博学多才也。能達古実矣。義政公之愛臣也。寛正二年、爲丹波國守護職。同六年与管領政長有不和事而辞職云云。…文明十年六月三日死五十七」とある。
- (7) 注(5) ブログでは同家に関して次のような仮説も示している。
- 1 柏原氏に嘉助を名乗る者が多いのは、同じ名を名乗る者が多い関一族(柏原町の隣町三宅町に居住)の分流であったからではないか。
- 2 京都府大江町(現福知山市)の豪農平野家に楠公の家臣柏原氏の末裔という伝承がある点から、同家も臣下筋の家系ではないか。
- いずれも明確な根拠があるわけではなく、あくまでも仮説の域にとどまっている。特に1の「嘉助」名は正雅が丹波国上杉村から京に転住した後、扇商において名乗った名前であり、『大系譜』を見てもそれ以前に嘉助を名乗った例は見受けられない。
- (8) 書架番号：D三一〇〇七。
- (9) 当日(明治十年七月十九日)の新聞記事は未見だが、後掲『日出新聞』明治十八年七月二十一日(火)・第八十八号(三三四段目)の記事の中に、その時の方が言及されている。
- (10) 引用は京都大学人文科学研究所図書館所蔵マイクロフィルム版による。以下、本稿での『日出新聞』の引用は同マイクロフィルムによることとし、引用に際しては必要なもの以外振り仮名を省き、適宜句読点を補うこととする。なお、引用記事の中で「後見」

とされる「生駒正久」は正雄の叔父（正家の弟）。『系譜』には「駒市。禁裡御所御内生駒山閉為養子、号匠作」と記されている。(11)『系譜』には「二男」とあるが誤りであろう。

(12) 瓦全一族の墓碑は「図A-2」のように左右二列（ただし、⑦だけは後ろ中央）に配され、先述したように風化による崩壊防止のためワイヤーで一括りにされている。右列の①は先祖代々の墓（文化七年建立）、②は瓦全の両親の墓、そして③が瓦全夫婦の墓となる。左列④は瓦全の兄（正當・正博）と妹（くに）の墓。⑤は瓦全の伯父（正榮）ほか二名（戒名の判読不能）の墓、⑥が瓦全の息子（正度）夫婦、そして⑦が瓦全の孫（正克）夫婦の墓となる。瓦全夫婦の墓碑銘は判読しづらいが、『京都名家墳墓録』（寺田貞次著 村田書店 大正十一年初刊、昭和五十一年覆刻）を参考にしながら判読すれば次のようになる。

蓮池院瓦全日芳 詠月常清
妙法 蓮心院妙恵日榮 妙雅孩女 靈

瓦全夫婦の下に「詠月常清」「妙雅孩女」と記されているのは早世した二人の乳幼児のことであろう。すなわち右下の「詠月常清」が七歳で没した長男の安太郎、左下の「妙雅孩女」が天明四（一七八四）年襦袢の内^{むつまき}に亡くなった長女を指していると考えられる。また、墓碑の向かって左側面には「柏原氏」の文字、右側面には瓦全の辞世句「もたれたる巨燧^{すなはち}即寂光土」が刻されている。

(13) 詳細は前掲拙稿『柏原家系譜』と五升庵瓦全の家系―扇商の実態を中心に―を御参照いただければ幸いである。

